障害幼児の福祉に関する研究

(第2報) 障害児に関する認識調査

研究第7部　高橋種昭
野田幸江

<共同研究者>
日本女子大学　吉沢英子
神奈川県社会福祉協議会　藤村哲
慈恵会医科大学　丸山普
浅草寺福祉会館　宇多小路利子
桧町小学校　仁平勝巳

I 研究目的

障害児の福祉を考えるにあたり，まず種々の障害を持つ幼児が，社会生活の第1歩である保育園，あるいは幼稚園という集団の場で，どのように受入れられ，そこにどのような問題が存するかを明らかにするために，前年度は，その実態調査を行い，保育者と障害児との関係を明らかにした。そこで今回は障害児をとりまく社会のもう一つの側面である一般の人々の障害児に対する意識，すなわち障害児というものをどのようにとらえ，どのように接しようとしているかを，おさえることにより，彼等をとりまく環境理解を深めようとしたのが，この研究の目的である。

II 研究方法

調査は質問紙法により行う。

一般的に，あるものとその人との関係の深さを知ろうとする場合，そのものへの関心の有無，そのものに対して持つ知識の程度，そして，その知識なり，関心なりを実際の生活の中でどのように行動化しているかの3つの側面からのアプローチが必要と考えられるが，今回の質問紙においても，障害児に対する一般の人々の認識をその3つの側面からおさえると同時に，さらにその人の障害児観ともいうべきものをとらえるよう試みた。それは，それらの点が明らかにされれば今後，障害児対策を考える場合の一般の人々への啓蒙のあり方をさぐることができるのではないかと考えたからである。

具体的な質問は第2表に示す通りであり，問1，11，13，15が関心の有無を知るための項目であり，以下，問5，7，10，12は知識，問3，6，8，14，17，18は行動，問2，4，9，16が障害児観を知るための項目である。

なお，知識の有無を知るための項目に，精神薄弱児という言葉を用いた理由は，障害児という言葉を用いた場合，その種類，程度の多様さ故におこる被調査者の思い浮かべる対称の違いから，生ずるであろう混乱をさけるためである。

また行動に関する項目において，二重質問になった理由は，そのような事実に遭遇したことの有無を尋ねることによって，出来るだけ回答を観念的なものとせず，現実のものとすることができるのではないかと考えたからである。

さらに，もしこのような質問の回答の上に差がみられるなら，その差を生ぜしめている要因として，どのようなものが考えられるかの検討を試みようとして第1表に示すような face sheet がつくられた。

第1表

おねがい

最近心身障害児のことがいろいろ問題になっています。

皆様方がこれらの子ども達についてどのような御意見・お考えをお持ちなのか是非おきかせ下さい。

つきましては、別紙のような質問紙を作りました。

お忙しいところ御面倒な事とは存じますが、御回答をおよせ下さいますようお願い申しあげます。

お母様が御記入下さい。お名前はおかきになる必要はありません。

1)

	年　令	学　　歴	職　業（註をおよみ下さい）	以前に子供の教育や福祉の仕事につかれたことがありますか
記入者（妻）	才	中学卒 高校卒 短大卒 大学卒 その他（　　）		有（具体的に御記入下さい） 無
配偶者（夫）	才	中学卒 高校卒 短大卒 大学卒 その他（　　）		有（具体的に御記入下さい） 無
住　所	都（府・県）	区（市・郡）	町（村）	
子供の数	人	才	才	才

職業欄　註　例えば　会社員（事務）　公務員（事務）　運転手　セールスマン　教員（幼・小・中・高・大）　店員　農業　大工　等、なるべくわかりやすく具体的に御記入下さい。

2)

		いる場合、それはどんな障害ですか
あなたの家族に障害者や障害児がいますか	いる　いない	
あなたの親せきに障害者や障害児がいますか	いる　いない	
あなたの家の近所に障害者や障害児がいますか	いる　いない	
あなたの知人やその家族に障害者や障害児がいますか	いる　いない	
あなたのお子さんのクラスに障害児がいますか	いる　いない	

3) 次にあげるものの中であなたが障害児と思われるものに○印をおつけ下さい。（○印はいくつつけてもかまいません）

ちえおくれ　盲児　ろう児　肢体不自由　奇型　弱視　落つきのない子　小児ぜんそく　引込思案　体のよわい子　難聴　どもり　ことばのおくれ　てんかん　自閉症　脳性マヒ　チック　夜尿　白子　色盲　虫歯　乱暴な子

第2表

この調査は個人の考えというより一般の傾向を問題とするものです。下にあげた3つの答のうちから一番適当、或いは一番御自分の気持に近いと思われるものを1つ選んで○印をおつけ下さい。

質 問

1．新聞や雑誌に障害児についての記事がのっているのを見つけた時、それを読もうとしますか	つとめて読む	読む事もある	読まない
2．障害児の教育にお金を使うよりそのお金を優秀な子どもの教育にまわす方がよりよいと思いますか	思う	どちらかといえば思う	思わない
3．障害児には同情するが進んでかゝわりあいを持つ事はさけますか	さける	さける事もある	さけない
4．障害児はいくら指導しても結局大半は職場で使いものにならないと思いますか	思う	どちらかといえば思う	思わない
5．精神薄弱児の大半は遺伝だと思いますか	思う	よくわからない	思わない
6．町角で障害児の為の募金などしているのに出会う事がありますか	はい	いいえ	
その時あなたはそれに応じますか	必ず応ずる	応ずる事もある	応じない
7．精神薄弱児と遊ばせると自分の子どもにあまり良くない影響があると思いますか	思う	よくわからない	思わない
8．障害児がいじめられたり、からかわれているのを見かける事がありますか	はい	いいえ	
その時あなたはかばってあげますか	必ずかばう	かばう事もある	かばわない
9．1人の子供に月約15万円もの費用がかゝる重症心身障害児施設は不必要だと思いますか	思う	どちらかといえば思う	思わない
10．障害児には特別の手当（扶助料等）のある事を知っていますか	知っている	少しは知っている	知らない
11．町の中で障害児を見かけた時その子供や親の生活や気持について考えてみる事がありますか	考える事が多い	考える事もある	考えない
12．精神薄弱児は治らないと思いますか	治る	よくわからない	治らない
13．知人や友人との話の中で障害児の事を話題にすることがありますか	よく話題にする	話題にする事もある	話題にしない
14．あなたは障害児というものを差別しないように子供を育てていますか	育てている	育てるよう心がけている	育てていない
15．テレビで障害児の問題を扱った番組があるのを知った時、あなたはそれを見ようとしますか	つとめて見る	見る事もある	見ない
16．障害児の親たちは、子供を普通児と同じクラスで学ばせたいと思っていますが、あなたはそれをどう思いますか	受入れたい	どちらかといえば受入れたい	受入れたくない
17．障害児の為に役立つ事を何かしたことがありますか	はい	いいえ	
障害児の為に役立つ事を何かしてみたいと思うことがありますか	思う	思う事もある	思わない
18．あなたのお子さんは障害児と遊ぶことがありますか	はい	いいえ	
その時あなたはなるべく遊ばないようわが子を遠ざけようとしますか	遠ざける	遠ざける事もある	遠ざけない

19．心身障害者のための収容施設の目的は何であるか、一番重要だと思われるもの1つだけを選んで○印をおつけ下さい

a）治療・教育の効果をあげるため

b）障害児の世話は大変なのでその家族を少しでも楽にしてあげるため

c）社会の中で障害児が暮すのはかわいそうだから障害児だけの生活の場を作ってあげるため

d）社会の人々の生活を守るため（迷惑にならぬように）

e）将来社会の他の人と一緒に生活できるようにするため

Ⅲ 調 査 対 象

本来なら，認識調査であるため，一般の人々に行うべき性質の調査ではあるが，被調査者をとらえにくいということと，最近幼稚園等で障害児を受入れる場合，他の父兄への啓蒙，指導の成功いかんが，障害児受入れの是非および保育効果に多くの影響を持つことが指摘されているところから，障害児保育に積極的なとりくみをしている園にみられる特徴をとらえることが出来たらとの考えにたち，幼稚園および保育園児の父兄に質問紙を配布し回収した。なおこの種の質問紙の場合，ややもすれば観念的な反応が多くなる上に，園を通した作業であれば，一層そのことは考慮しなければならないため，今回は無記名による回収とした。

質問紙配布園およびその回収率は第3表に示す通りである。

第3表

	園　　名	配布数	回答数	回答率	平均
障害児在園有	聖アンセルモ幼稚園	84	57	67.85	71.04
	川村　〃	100	86	86.00	
	文化　〃	130	94	72.30	
	浅草寺　〃	112	65	58.03	
	東五軒町保育園	100	60	60.00	67.16
	のぞみ　〃	62	37	59.67	
	千束　〃	100	69	69.00	
	信愛　〃	170	136	80.00	
障害児在園無	杉並教会幼稚園	150	99	66.00	70.83
	つくし　〃	75	73	97.33	
	平塚　〃	150	75	50.00	
	まんとみ　〃	151	105	70.00	
	長明保育園	156	113	72.43	65.44
	すぎのこ　〃	58	41	70.68	
	妙福寺　〃	280	149	53.21	
計		1,878	1,259		

Ⅳ 調査期日・結果及び考察

1 調査期日

昭和49年1月～3月

2 結果及び考察

1) 被調査者の生活背景

(i)被調査者の年齢・学歴の分布

第4表 (1) 年齢

	～25歳	～30歳	～35歳	36歳～	不明	計
母（記入者）	18	271	578	351	37	1,255
父（配偶者）	2	78	411	678	33	1,202

第4表 (2) 学歴

	中卒	高卒	短大卒	大卒	その他	不明	計
母(記入者)	264	728	108	76	26	53	1,255
父(配偶者)	221	429	14	453	22	63	1,202

(ii)子どもにかかわる職業経験の有無

被調査者のうち過去および現在，子どもにかかわる職業についたことのあるものは第5表に示す通りである。

(iii)障害児および障害者の有無

被調査者の周囲における障害児・障害者の有無についてきいたもので，身近なところに障害をもつものがいるか否かは，その人の障害に対する考え方に大きな影響をもつと考えたからであり，第6表がその結果である。

第5表

園　別	経験有 父 総数	経験有	%	経験有 母 総数	経験有	%
*無　幼	298	16	5.36	301	15	4.98
無　保	275	7	2,54	301	11	3,65
有　幼	342	5	1,46	352	16	4.54
有　保	287	8	2.78	301	12	3.98
計	1,202	36	2.995	1,255	54	4.30

* 園別の欄の有無は障害児在園の有・無をあらわし，幼・保は幼稚園・保育園をあらわす。(第6表以下も同じ。)

障害児有のグループにおいて，身近に障害児あるいは障害者がいると答えたものが，ほぼ半数あったのに対し他のグループではいずれもその数が全体の⅓前後とやや少ない。身近なものの内わけとしてあげた，家族，親せき，近所，知人においては，それぞれのグループがほぼ同じような傾向を示しているが，ここで意外だったのは子どもの通園しているクラス内の障害児有無についてきいた結果である。すなわち障害児はいないとしている園においても2～3％ちかくの者がクラス内に障害児がい

第6表

	障害者			家族に		親セキに		近所に		知人に		クラスに	
	総数	いる	%	いる	%	いる	%	いる	%	いる	%	いる	%
無幼	302	91	30.13	3	0.99	21	6.95	41	13.57	43	14.23	6	1.98
無保	302	111	36.75	10	3.31	36	11.92	54	17.88	48	15.89	9	2.98
有幼	352	182	51.70	21	5.96	31	8.80	58	16.47	59	17.32	108	30.68
有保	303	100	33.00	10	3.30	33	10.89	41	13.53	35	11.55	5	1.65

第7表

	総数人	ちえおくれ	盲	ろう	不自由	奇型	弱児	難聴	てんかん	自閉症	脳マヒ
無幼	302	57.95	87.08	85.43	93.04	73.50	12.25	45.03	20.52	48.01	92.71
無保	302	48.67	80.79	76.15	89.73	73.84	10.59	32.11	24.17	35.09	86.42
有幼	352	56.81	83.23	81.81	89.77	63.35	10.51	38.35	16.76	55.68	86.07
有保	303	52.47	79.53	77.55	90.75	73.92	13.20	36.30	19.47	35.31	90.09
平均	(計1,259)	53.98	82.66	80.24	90.82	71.15	11.64	37.95	20.23	43.52	88.82

	色盲	白子	どもり	言葉遅	チック	夜尿	喘息	落つき	引込	弱い子	乱暴	虫歯
無幼	10.59	10.92	5.96	6.95	6.62	0.66	3.97	0.66	0.33	0.99	0.66	0
無保	9.93	12.25	6.29	6.95	3.97	1.65	5.62	1.98	0	0.99	0.33	2.31
有幼	7.10	7.38	8.23	6.25	5.68	0.28	2.55	1.13	0	1.13	0.56	0.56
有保	9.24	12.54	8.91	8.25	4.95	0.99	3.63	1.32	0	0.33	1.65	0.33
平均	9.22	10.77	7.35	7.10	5.31	0.90	3.94	1.27	0.08	0.86	0.80	0.80

第8表

	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13以上
無幼	1.98	0.33	1.32	4.96	6.29	19.53	16.88	14.90	12.25	10.26	4.96	4.63	0	1.65
無保	1.65	2.64	3.97	6.95	6.62	18.87	18.54	14.23	10.59	8.94	1.98	3.31	0.99	0.66
有幼	3.97	1.70	2.55	5.68	5.96	13.63	19.03	19.60	11.36	7.10	4.82	1.42	0.56	2.55
有保	1.98	1.98	3.63	5.94	11.55	16.50	11.22	19.80	9.24	7.59	5.61	1.98	1.65	1.32
平均	2.39	1.66	2.87	5.88	7.61	17.13	16.41	17.13	10.86	8.47	4.34	2.84	0.80	1.55

るとの認識を持っている。ということは障害児という言葉の持つあいまいさを示すものであろう。

一方，障害児有の幼稚園は，いずれもかなり積極的に障害児を受入れている幼稚園であり，その数も全園児の5％近くが特別の配慮を要する子どもであるという現実にもかかわらず，約30％の人しか，障害児ありとしていないということは，生活を共にすることにより，ことあらためて障害児といわねばならぬような疎外感を彼等に感ずることがないためではないだろうか。

以上が，この調査の被調査者群の主な特徴である。

2）障害児と呼ばれるものについての認識

一口に障害児といっても，その種類，程度は様々であり，この種の調査を行う場合当然問題となるところであろうが，今回は質問紙法の持つ限界と，認識調査ということで，あえて質問には障害児という言葉を用いたが，それに先だち，その程度まではおさえることは無理としても，一般に障害児といった場合どのような子どもの状態を頭に思い浮かべるかを知るべく，行ったのが face sheet の「問3」である。

第7表は状態像別に障害児としてえらばれたものの全体に対する百分率を表にしたものであり，第8表は選んだ数別に百分率を出したものである。いずれも各グループとも同じような傾向を示していることは，この結果が一般的な傾向を表わしているといってもよいであろう。すなわち，盲，ろう，肢体不自由，脳性マヒ，奇型など比較的，視覚的にとらえやすい障害児に対しては全体の

70～80％以上のものが障害としてとらえているのに対し，ちえおくれ，てんかん，自閉症，難聴，弱視などその定義があいまいであったり，その程度に幅があり，確かに軽いものの場合，障害とはいえないようなものに対しては10～30％（ちえおくれのみ50％）の人があげているにすぎない。

一方，落つきなし，弱い子，乱暴，虫歯を障害としてあげたものは大きく２つに大別され，その一群は障害として選んだものが３つ以下という群で，虫歯，落つきのなさ，乱暴が選ばれ，もう１群は10以上をあげた群で，そこでは弱い子が圧倒的に多く選ばれている。そして先の一群においては中学卒がその大部分であったのに対して10以上をあげた後の群においては大学卒が多かったということは，一般には，かなりよく用いられている言葉ではあるが，まだまだ障害という言葉を用いた場合，そこから受ける具体的なイメージには個人により，かなりのひらきがあることがわかる。

第９表

	問ＮＯ	＋の反応	やや＋の反応	わからない	やや－の反応	－の反応	無回答
関心	1	624	614			10	11
	11	728	508			15	8
	13	99	875			266	19
	15	524	756			45	12
知識	5	(489)		(620)		(133)	(17)
	7	540		568		129	22
	10	657	347			234	21
	12	(257)		(866)		(102)	(29)
行動	3	561			590	57	41
	6	148	797			94	225
	8	429	389			26	415
	14	357	776			48	78
	17	302	745			106	96
	18	651			207	18	384
障害児観	2	1,153			55	33	18
	4	913			272	30	43
	9	805			117	198	39
	16	410	619			158	72

３）問題別回答数

先にもあげたように障害児の在園している園に子どもを通わせていることが，障害児というものに対する認識にかなりの影響を与えているのではないかとの考えから，一応ここでも障害児のいる園といない園とにわけて集計を行ったが，各問とも両者の間に何ら統計的に有意な差を見出すことができなかったため，一般的な傾向を知るという意味でまとめた結果が第９表である。

この表からいえることは，

(1)関心と知識の項目において無回答が少ないのに対して，行動の項目において無回答が多いということは，

（ｉ）やはり意識のうえでは反応しやすいことも，いざ実際の行動となると答えにくい。

（ii）まだまだ世間ていということを気にすることの多い日本の社会の中で，現実に質問のような場面に出会うことが少ないか，あるいは例へ出会うことがあっても，それを自分とのかかわりの中でとらえることがないので見過されていることが多い。

の２点が考えられる。

(2)関心の項目で問13において，マイナスの回答が多かったことは，他の項目が与えられるものに対する反応をきく質問であるのに比し，問13は，より積極的な関心を知るための質問であり，その点の差は今後障害児に対する一般の人々の関心を高めて行く上での示唆を与えるものであろう。

第10表

問No	経験あり	経験なし	無回答	計
6	598	300	361	1.259
8	334	652	263	1,249
17	222	859	178	1,259
18	162	875	222	1,259

(3)行動の項目のうち，問6，8，18において無回答が多かったのは，これらの問いについては経験の有無が影響を与えることを考慮して，まず経験の有無をきいたところ第10表のような結果を得ており，経験なしとしたものが次の問いにも答えない場合が多かったためである。しかし経験の有無の問いについてかなりの無回答があったことは，何を意味するのか，検討されねばならない問題であろう。しかし同じ経験をきいた問17において，無回答がやや少なかったことは，次の問いでマイナスの反応が多かった事実と共に，さらに検討がなされなければならない点である。

(4)障害児観に関する質問では，それぞれの回答傾向は異る。しかし問９と16において否定的な回答が多かったということは，問２と４が同じ障害児観をきく問題でもややばくぜんとした問題であるのに対して，それがより具体的な数字であらわされたり，直接かかわりを持つ問題であった時，やはり受入れにくいという心情をあらわしたものであり，まだまだ障害児が何の抵抗もなく，社会の一員として過せられるには，多くの日時と努力が必要なことが痛感される。

第11表　心身障害者収容施設の目的　　（a～eは第2表質問紙「問19」参照）

	総数	a		b		c		d		e		無回答	
		実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
無幼	302	77	25.49	13	4.30	16	5.29	0		185	61.25	11	3.64
無保	302	68	22.51	12	3.97	18	5.96	3	0.99	183	60.59	18	5.96
有幼	352	83	23.57	15	4.26	12	3.40	0		229	65.05	13	3.69
有保	303	66	21.78	15	4.95	24	7.92	2	0.66	184	60.72	12	3.96
計	1,259	294	23.35	55	4.36	70	5.55	5	0.39	781	62.03	54	4.28

(5)知識の項目中問5と問12の回答に（　）がついているのはこの場合プラスの反応，マイナスの反応と決めることの出来ない問題のためであり，右欄の－の反応欄にかかれている数字が，精薄児は遺伝だと思う，治らないと思うと回答したものの数である。わからないと答えたものが多いことはまず妥当なところであろう。しかし問7と問10においてマイナスの反応をしたものが，かなりあったことは，注目しなければならない事実であろう。特に問7の精薄児と遊ばせることについての影響に対する反応は，前回の保育者の調査のときにも，その功罪が論じられた問題である。

4）収容施設の目的

結果は第11表に示す通りであり，収容施設に対しては治療機関としての役割りを考えているものが多く(a)，まず順当な結果であろう。

ただ，ごく少ない数ではあるが，「d）社会の人々の生活を守るため」に施設があるという考えに○をつけた5名が，いずれも障害児の在園している園であることには，数が少ないということのみで無視してしまうことのできないものがあるのではないだろうか。むしろ障害者が差別され，隔離されることが多く，目にふれがたい社会なるが故に，得た回答傾向なのではないだろうか。

5）その他

障害児の在園する園，在園しない園など園別による回答傾向に，まったく差がみられなかったことは先にもふれたが，その他，学歴，職業，子どもにかかわる職業経験の有無などについて，回答傾向の差を検討したが，いずれも有意な差をみることはできなかった。

V　ま　と　め

1)　今回の調査を通じてまずいえることは，かなり安易に使われている障害児という言葉でさえ，その内容は受取る側によってかなり異っているということである。ということは，今後障害児に関する問題が話しあわれる場合，そこで使われる言葉は慎重な上にも慎重な検討が必要であり，共通な意味を持った言葉での話し合いがもたれなければならない。

2)　ある個人の障害児に対する考え方なり，態度なりを作り出す上で大きな影響をもつものとして，学歴，職業，地域差，障害児と接する機会の有無，などを考えたが，それ等の間には何らの差を見出すことができなかった。その理由を明らかにするためには問題の妥当性の検討もさることながら，それ等の影響を与えるものとしては，当初われわれが考えたような表面的なものではなく，もっとその人の生活史的なもの，すなわち，その人がどのような価値感を持つ両親に育てられて来たか，そしてどのような人間関係の中で育って来たかが検討されなければならないのではないだろうか，そう考えた時，とかく福祉というと経済的な面が重視されがちであるが，真の福祉とは，人と人との結びつきが作り出すものであり，幼児からの障害児と共にある生活こそ，将来，障害者と共に住める社会の作れる大人達を育てるのではないだろうか。

3)　障害児を受入れている園での他父兄への啓蒙はかなり積極的に行なわれているにもかかわらず，それが顕著な差となってあらわれなかったことは，意外だった。しかし，現実には障害児が在園しているにもかかわらず，在園していないと答えたものが最も少ない園の場合でも60%近くあったという結果を考え合わせた時，そうした結果は園の先生方の障害児を差別視しない考えが，父兄の間にも徹底しているとみることもできよう。

終りに今回の研究に協力して戴いた幼稚園，保育所の先生方に心から感謝の意を表したい。